

ガイダンスカウンセラーの挑戦 9

公立中学校の教師としての実践 ―受け継がれるシステムをつくる―

東京都公立中学校教諭

笠さわ子^{りょう}

東京都の公立学校は、基本的には六年で異動するきまりになっている。毎年学校は数名の教員の異動があるため、学校のさまざまな体制の継続が課題になる。また自分自身も異動するため、学校にガイダンスカウンセリングをシステムとして構築しておかないと、人が代わるとばったりと実施されなくなってしまう可能性もある。そのような公立中学校に勤務するガイダンスカウンセラーとして心がけてきたことをまとめておきたい。

1 学校のシステムの構築

現在、学校では「学校いじめ対策委員会」や「特別支援校内委員会」など、ガイダンスカウンセラーの専門性を生かせる機関の設置が求められている。このような生徒の心理面に関わる委員会を、運営委員会や生活指導部会と同じように、週一回のペースで行う必要

があることを専門的な立場で管理職に申し出て、時間と校務分掌の一つとしてメンバーを確保した。こうすることで個人で活動するのではなく、学校のシステムにすることを目標とした。

メンバーは、各学年一名と生活指導主任、養護教諭、特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、管理職などで構成され、そこで話し合ったことは各学年に下りるようにしている。これまでも必要な修正や工夫を繰り返しながら、このシステムの土台は維持されているので、学校運営の柱の一つとして継続されるだろうと考えている。

2 学級経営の支援

学級経営の経験が少ない若手の先生が一つの勢力となると、若い先生どうしで「こんなものだろう」と安易に判断し、ベテランの先

生からみると危なっかしく感じることがある。校内研修会の講師に呼ばれても、最近はこのように依頼が増えている。表向きのタイトルはあっても、本音では「学級経営・生徒対応の基本」を教えてほしいというのである。先生のひとつがその学校が一・二校目で、ベテランの先生は少数派、かつ難しい学級を受け持つことも多いために対応に苦労しており、若手の先生に助言しにくい事情もあるのだろう。また、経験に拠って立つ指導であるため、理論的に若手に伝えることが難しいということもあるだろう。私はガイダンスカウンセラーであり教師でもあるので、理論と実践を同時に伝えられることは強みとなっている。

本校では、四月に生活指導部から生徒指導の手引きとともに「学級経営のスタンダード」と「SGE(構成的グループエンカウンター)・SST(ソーシャルスキルトレーニング)の年間計画を配布している。さらに、年度始めと学期始めのSGEは時期に合わせて資料を配布し実施を促すことで、若手・ベテランを問わず、どの先生でもある程度の学級経営の土台がつけられることを目指している。

3 生徒との人間関係(セーフティネット)の構築

中学生は不安の波が次々に押し寄せる時期である。それに加えて新型コロナウイルスの影響で学校行事が減り、授業以外で活躍する場面や友

達と遊ぶことも減り、閉塞感が高いなかで我慢している。授業でもグループワークができず黙々と学習しなくてはいけない状況に耐えられなかったり、家庭で過ごす時間が増えたため家でのストレスが増えたりして、保健室につらさを訴えにくる。その数は、とても養護教諭一人では対応しきれない。でも担任には担任としての役割があり、ふだんのかかわりもあるなかでは言いづらい悩みもある。

そこで、すべての生徒に個別に対応するために、本校では生徒全員が選んだ教師と二者面談をする時間を設定してきた。心の担任として「いざというときに相談できる」という関係をつくるのがねらいである。教師は担任していない生徒二十名前後を担当し、管理職の先生や栄養士さん、スクールカウンセラーも希望した生徒を引き受けてくださっている。面談は一人につき十五分程度で随時行っていたが、時間設定が難しいことが課題となっていた。そんななか昨年度、コロナ対策のため文通方式で実施を試みたところ、時間の課題が解消され、心の担任としての機能は維持でき、思いがけず良い方法が発見できた。面談よりも文通のほうがやり取りを活発にできて継続しやすく、第一段階として文通で関係ができたことで、心配な生徒には「ちょっと話す？」と声をかけやすく、生徒も警戒感が少なく応じることができている。実際は指導が

目的的面談であっても、文通の延長で話を聞くという形なので、教員側も傾聴する姿勢で臨むことができるなどメリットが大きい。

4 担任へのコンサルテーション

四月に入学してきた一年生は、小学校からの引継ぎどおりの対応で接続がうまくいくこともあれば、小学校ではうまくいっていたたに見過ごされていたが、中学校生活で課題が浮かび上がることもよくある。一年生は、異動してきた先生とうまくいかずに生徒から不満が噴出したり、先生と対立したりすることがある。三年生は、受験への不安や周りの生徒の受験に向けた変化に耐えられず、情緒が不安定になる生徒もいる。

このような三次支援の必要な生徒について、ホワイトボードを使った対策会議を行っている。対応策を考えてもらいたいと思っている生徒を担当がピックアップし、特別支援校内委員会に上げてもらい、優先度の高い生徒から会議を実施している。一人二十分〜五分程度で実施できるため、一回で二人の生徒について検討することもある。時間割を変更して担任に出席してもらおうが、難しい場合は担任と私の空き時間に、課題に応じたメンバー（養護教諭やスクールカウンセラー、特別支援教室巡回指導教員や月一回来校する発達心理士など）を招いて実施する。検討する

生徒は、実際に問題行動が起きている生徒から始まり、対応にゆきづまった生徒や対応策を統一する必要がある生徒など、多くの人の意見を聞きたい場合に向いている。

これ以外にも、「会議を行うほどではないが、どうしたらいいかヒントをもらいたい」というような場合は、担任とマンツーマンで対策会議をすることもある。私は教科の特性上、授業で全生徒と関わるため、どの生徒のことを相談されても答えられる強みもある。今はまだ軽いからと放っておいて事態が一層悪くなってからではなく、まだ程度の軽いうちに対応することは生徒にも教師にも良いことだという思いであるが、ときには生徒にも教師にも失敗を経験させて自分のこととして考えたほうがよい場合もあることを、最近はこちらとめて心理的距離を保つようにしている。学級経営についてのコンサルテーションは、マンツーマンでやる場合もあるが、可能な場合は何人かの先生を募って、その先生を支えることをきっかけとして、先生たちの支え合いが継続するネットワークをつくるようにしている。そして、対応策を伝える際には、どういう理論的背景に基づいているかを伝え、今回の対応だけでなく他の対応にも生かせるようにすることでその先生の指導の引き出しを増やし、その先生がいろいろ他の先生にも伝えることができるように努めている。